哲學研究　第二百十九號　第十九卷第六號

# 辯證法的一般者としての世界

西田幾多郎

## 一

我々に現實の世界と考へられるものは、個物の世界でなければならない。一般的なるものは、單に可能的なるものに過ぎない。實在的なるものは時間的と考へられ、又働くものが實在的と考へるのも之によるのである。併し個物的なるものを限定する一般者とは如何なるものでなければならないか。個物の世界とは如何なるものであるか。

個物は一般者の限定として考へられる。一般的なるものに種差を加へて最後の

種に至り、更に之を越えて極限點として個物といふ如きものを考へることができる。併しかゝる考へ方によつて考へられた個物といふものは、眞の個物ではない。それは何處までも一般者の一部分といふ意味を脱することはできない。個物は自己自身を限定するものでなければならない。而して個物が自己自身を限定するといふことは、逆に個物が一般的なるものを限定するといふことを意味する。個物が種々なる性質を有つとか、個物が働くとかいふのは、個物が一般的なるものを限定することを意味するのである。眞の個物といふべき我々の自己では、對象的なるものを包むとすら考へられるのである。

個物は一般の限定として考へられると共に、逆に個物は一般を限定すると考へられる。併し單にそれだけにて個物といふものが考へられるのでない。個物は個物に對すると考へられねばならない。個物は唯個物に對することによつて個物と考へられるのである。唯一つの個物といふものは考へられない。互に相獨立するものが互に相關係するといふことが、物と物とが互に相働くといふことである。個物は働くものと考へられる所以である。而して互に獨立的なるものが相關係すると云ふには、その間に媒介者といふものが考へられねばならない。個物と個物とを媒

介する媒介者といふものは、如何なるものでなければならぬであらうか。

$$\frac{E_1\ E_2\ E_3 \cdots\cdots}{M}$$

Mは如何なるものでなければならぬであらうか。媒介せられるものと媒介するものとは、全然無關係といふことはできぬ。全然無關係ならば、媒介するといふこともできない。物と物とは空間によつて媒介せられると考へる。物と物とは空間を媒介として相働くと考へられる。併し斯く考へられる時、物は空間的性質を有つたものでなければならない、物は延長を有つたものでなければならない。無形なるものが空間によつて媒介せられると考へることはできない。かゝる考に徹底すれば、媒介せられるものは媒介するものゝ樣相といふに到らなければならない。物理現象が空間の歪とも考へられる所以である。而して斯く考へれば、個物といふものはなくなる。然らば如何にして個物が個物自身を維持しながら而も媒介せられると考へることができるか、個物は自己自身の内から媒介せられると考ふべきではあらうか。我々の意識現象に於ては、各自が獨立であると共に、直接に相結合すると考へられる。内的統一といふものは、結合するものなき結合と考へられる。意識の統一

が時間的と考へられる所以である。併し斯く內的に自己自身を限定するものは、眞の個物と考へられるものでなければならない。絕對に他から限定せられない而も他を限定するものが、眞の個物と考へられるのである。內的統一といふものは、個物と個物とを媒介するものではなくして、それ自身が一つの個物である。而して唯一つの個物といふものは考へられない。我々は個物と個物との媒介者Mを內的統一の如きものと考へることはできない。意識統一に於て各自が獨立であると共に一であるとは、固如何なることを意味するであらうか。かゝることが考へられるには、先づ部分が全體の意義を具すると考へられるであらう。併し如何にしてかゝる統一が考へられるであらうか。若しその何かの一點を中心として考へるならば、他に之に從屬することゝなり、個物と個物との相互限定の意味は失はれるであらう。何の一點も全體の意義を有つてはならない、中心と考へられてはならない。全體はいつも部分を越えたものでなければならない、それは中心のない統一でなければならない。然らばかゝる全體とは如何なるものであるか、かゝる統一は如何に考ふべきであるか。若しそれを各部分を越えて各部分の背後に考へるならば、それは右に云つた如き一つの個物といふものであつて、各部分が獨立とは云ふことはできない。

是故に意識現象は意味によつて統一せられると考へられる、意識の統一は意味的統一と考へられる。併し意識現象が單に意味的統一によつて成立するものとするならば、意識現象は實在的といふことはできない、意識統一に於て個物と個物とが相限定すると云ふことはできない、個物が働くといふことはできない、意識はMの意味を有つことはできない。意識現象は時間的と考へられる。意識は時間的に作用すると考へられる。意識は一つの流と考へられる。意識統一は動的と考へられる。併しかゝる意味に於ける意識統一とは如何にして考へることができるであらうか。若しそれを前者が後者を生ずるといふ樣に、因果的に考へられるならば、それは外的統一であつて、內的統一ではない、卽ち意識統一ではない、物の統一と擇ぶ所はない。それを一つの發展的統一と考へるか。合目的的統一と考へられるものも、尙外的たるを免れない。合目的的統一に於ては、後のものが前のものを限定するといふこともできるであらう。併し有機的統一に於ては、各部分が眞に獨立とは云はれない、卽ち個物的とは云はれない。各部分が獨立であつて而もそれ等が互に相關係すると考へられる時、意識の野といふ如きものが考へられる。意識の野の統一といふ如きものは如何なるものであるか。それは右に云つた如き意味的統一といふ如きもの

と考へるか、然らざれば單なる場所的統一と考へる外ない。而してその何にしても個物と個物との媒介者といふ意味を有つことはできない。

以上述べた如くにして、何處までも互に相獨立すると考へられる個物と個物との媒介者Mは、之を外的統一と考へることもできなければ、之を內的統一と考へることもできない。個物は一般者の限定として考へられねばならない。併し個物は何處までも個物に對立して考へられるのである。個物を否定する意味を有する一般者Aの限定として考へられるかぎり、個物といふ如きものは否定せられなければならない。ノエマ的限定として考へられるかぎり、私といふものはない。さらばと云つて個物と個物とは內的に統一せられると考へることもできない。內的統一といふことは部分が全體の意義を含んで居ることを意味するのである、生產點の如きものを意味せなければならない。個物は直線的に、時間的に自己自身を限定すると考へられる。個物は個物から生れると考へられる。併しかゝる場合にも、個物的限定は單に圓環的限定に對立し、圓環的限定を否定するといふのではない。時は單に一瞬一瞬に消えて行くといふのではない。時の統一といふものが成立するには、時の前後が何等かの意味

に於て結び附かねばならない。そこに限定するものなき限定といふものが考へられねばならない、消えて消えないものがなければならない。時の統一は曲線的意義を有つてゐなければならない。而してかゝる統一に於ては、一々の點が全體の意義を有つて居るといふことを意味せなければならない。併し此の如き意味に於て內的統一といふ如きものが考へられるかぎり、上に云つた如く眞の個物と個物との相互限定といふものは考へられない。それで上に云つた如き媒介者Mは、それが個物と個物とを媒介すると考へられるかぎり、非連續の連續といふ意味を有つたものでなければならない、個物に對し絕對の否定たると共に絕對の肯定の意味を有つてゐなければならない、無なると共に有の意味を有つてゐなければならない。卽ちそれは辯證法的限定と考へられるものでなければならない。それがノエマ的に一般者Aとして個物を限定すると考へられるかぎり、それは絕對の否定と考へられねばならない。而もそれが內的統一としてノエシス的に個物を限定すると考へられるかぎり、それは絕對に個物を肯定すると考へられねばならない。物に對し空間が無と考へられる如くそれは無と考へられると共に、物が物理的にあるといふことは空間の歪として考へられねばならない。今、直線的進行卽ち時を表はすにtを以てし、圓

環的限定卽ち空間を表はすにsを以てすれば、個物が個物自身を限定すると考へられる個物的限定は、いつもtの方向に考へられ、t線は何處までも直線的進行として、個物は個物から生れると考へられる。併しそれが眞に內的統一として、眞に個物から個物に移る、瞬間から瞬間に移る、眞に消えて生れるといふには、却つてそれは圓環的意義を有たなければならない。之に反し圓環的限定が眞の圓環的限定として、個物を包むといふ意義を有するかぎり、それは直線的限定の意義を有たなければならない。それは單に無限大の圓ではなくして、中心のない圓でなければならない。tとsとは固一つのものでなければならない、Mの兩面でなければならない。我々は單に主客對立の立場に立つが故に、內的統一と外的統一といふものが何處までも相對立すると考へられるが、內的統一といふのは我々が個物的に自己自身を限定と考へる自己肯定の方向に過ぎない。而してその自己否定の方向が外的と考へられるのである。Mに於て個物的限定卽一般的限定、一般的限定卽個物的限定といふことができるのである。

個物と個物との媒介者Mは右の如き理由によつて非連續の連續と考へられる、絕

對の否定卽肯定、無卽有と考へられる。併しかゝる意味に於て眞の辯證法的限定といふべきものは如何なるものでなければならぬであらうか。個物と個物とが相限定する、絕對に相獨立するものが相限定するといふ時、我々は唯二つの個物の相互限定を考へるかも知れない。併し二つの個物の相互限定といふのは、直に之を翻して一つのものゝ自己限定と考へることもできるのである。種々なる性質は各相異なると云つても、何物かに屬して一つの物の性質たるに過ぎない。有機的統一に於ては、各部分が獨立的たると共に一つの全體を構成すると云つても、それ等は全體の部分たるに過ぎない、全體が全體の意義を失ふと共に部分は部分の意義を失ふのである。それ自身に於て發展すると考へられるものに至つては、その一歩々々が唯一的として再び繰り返すことができないとしても、何等かの意味に於て內的統一といふ如きものが考へられるかぎり、それは一つのものゝ發展といふ意義を脫することはできない、何處までも合目的的統一の意義を脫することはできない。その各の段階は眞に個物的といふことはできない。眞の個物と個物との間にはアリストテレスが知るものと知られるものとを包む類概念はないと云つた如く、兩者を包む所謂一般者といふものがあつてはならない。而もその兩者が相限定する所に、絕對に相反

するものゝ自己同一として、始めて辯證法的限定といふ如きものが考へられるのである。私は二つの個物と個物との相互限定といふものは、尙單に主觀客觀の相互限定といふ如きものと考へられると思ふ。主觀と客觀とは絕對に相對立するものでなければならない。而も我々の行爲といふ如きものに於ては、主觀が客觀を限定し、客觀が主觀を限定する、主觀卽客觀、客觀卽主觀として、辯證法的過程といふ如きものが考へられるのである。併しかゝる意味の辯證法的統一に於ては、尙個物と個物との相互限定といふことを考へることはできない。絕對に相反するものゝ同一主客合一として、シェーリングの同一といふ如きものを考へることができるであらう。併しかゝる立場に於ては、動くものとか、變ずるものとかいふものも考へることはできない。之に反し無限なる動的統一として辯證法的過程といふものが考へられると云つても、そこに或は精神として、或は物質として、一つの動的統一といふものが考へられるかぎり、それは何處までも一つのものといふ意義を脫することはできぬ、一元論的立場を脫することはできぬ。かういふ立場に於ては、眞に個物と個物との限定の世界、眞の現實の世界といふものを考へることができぬ、ポイエシスの世界といふものを考へることはできぬ。それは尙單なる客觀的世界といふ意味を脫するこ

とはできない、知的自己の對象界といふ意味を脱することはできない、我々の自己を包む世界ではない、眞の社會的歴史的世界ではない。ヘーゲルの概念といふのは尙有機的統一の意義を脱してゐない。それが自己自身を否定して自己に還ると云つても、尙所謂一般者の意義を脱してゐない。然らざれば唯一つの個物といふ意義を脱してゐない。ヘーゲルの辯證法が眞の絶對否定の辯證法と考へられない所以である。一般的なるものが眞に自己自身を否定すると考へられる時、それは個物の世界となるといふ意味を有たなければならない。單なる過程として自己自身を限定すると考へられるかぎり、それは尙眞の絶對否定ではない。一般者の自己限定の過程と考へられるものは、却つてそれが個物的なるものを包むといふ所に基礎附けられてゐなければならない。眞の辯證法的統一といふものは、何處までも主語的方向に、ノエマ的方向に考へられるものではない。自己同一と云つても、それが唯主語的方向に、ノエマ的方向に考へられるかぎり、それは何處までも唯一つのものといふ意義を脱することはできない。

右に云つた樣に、主客對立の如く如何に相反するものと云つても、唯二つのものゝ

相互限定から眞の辯證法的限定といふものは考へることはできない。眞の辯證法的限定といふべきものは、少くも三つのものゝ相互限定から考へられねばならない。甲が乙に對すると同じく丙にも對する。乙が甲丙に對し、丙が甲乙に對するも同樣である。私が汝に對する如く彼に對する。汝が私に對し、彼が私や汝に對するも同樣である。斯く三つのもの相互關係を斯く考へるといふことは、無數の個物を考へるといふことに外ならない。斯くして始めて眞に相獨立するものゝ相互限定、個物と個物との相互限定といふことが考へられるのである。絕對の非連續の連續と考へられるものは、かゝる意味を有つたものでなければならない。個物と個物との媒介者Mは場所的限定の意義を有つてゐなければならない。私が辯證法的一般者の自己限定として辯證法といふものを考へる所以である。

過程的限定を基とせないで場所的限定を基とするといふ所以である。一卽多、多卽一といふのも、かゝる場所的限定を意味するに外ならない。絕對的辯證法が絕對の否定を媒介とするといふ時、それは絕對の死を媒介するといふことでなければならない、絕對に死して生れることでなければならない。そこに何等の意味に於ても內面的連結といふ如きものが考へられてはならぬ、直線的なるもの、過程的なるもの

は否定せられなければならない。然らざれば、それは何處までも觀念論的辯證法の立場を脱することはできない。古來、經驗論の强味は此にあるのである。

併し斯く云ふも、私は單に過程的なるものを否定すると云ふのではない、單に一般者が一般者自身を限定するとか、場所が場所自身を限定するとか云ふのではない。單なる直觀主義とか神祕主義とかいふものを主張するのではない。私の辯證法的一般者といふのは、一般者と云つても、個物的限定に反し、個物を否定するものを意味するのではない、個物と個物との相互限定の媒介者といふ意味を有つて居るのである。抽象的には、媒介するものと媒介せられるものとは別々に考へられるかも知らぬが、上に云つた如く、無形なるものは有形なるものを媒介することはできず、有形なるものは無形なるものを媒介することはできない。媒介せられるものと、するものは、不可分離の關係を有つてゐなければならない。一體、自己自身を限定する一般者、所謂具體的一般者と考へられるものに於ても、既に媒介するものと、せられるものとが一であるといふ意味がなければならない。故に個物が一般者であるとか、主語が述語であるとか考へられるのである。何等かの意味に於て物といふものなくして媒介といふものが考へられないと共に、媒介といふことなくして物といふものも考

へられない。何處までも獨立に自己自身を限定する個物といへども、媒介なくして考へられない。個物は個物に對すると考へられるのである。個物は一面に於て一般者の限定として考へられると考へられる所以である。個物が個物自身を限定する、物が自己自身の内から自己を限定するといふことは、上に云つた如く、我々の意識統一に於て考へられる樣に、非連續の連續といふ意味を有つてゐなければならない。而してかゝる統一の極限に於ては、それは直線的ではなくして圓環的と考へられねばならない。之と共に、一般的なるものが自己自身を限定すると考へられる時、それは何處までも個物的なるものを包むといふ意味を有つてゐなければならない。然らざれば一般者といふ意義を有つことはできない。私が個物と個物との媒介者として辯證法的一般者といふのは、かゝる意味に於て個物を包み、個物を限定する意義を有つたものである、外的一般者と内的一般者、外的統一と内的統一とが一となつたものである、有卽無と考へられるものである。故に之に於てあるものは、何處までも個物的に自己自身を限定する、直線的に自己自身を限定すると考へられる、時間的と考へられる。それと共に何處までも一般的なるものから限定せられる底の底まで一般的なるものから限定せられると考へられる。それは一般的限定卽個物的限定、

個物的限定卽一般的限定といふ樣に、自己自身を限定するのである。すべて有るものは行爲するものであるといふことができる。例へば、物理現象の如きものを行爲するものと考へるのは、異樣に感ぜられるでもあらうが、私の行爲するものといふのは、右の如く一般的限定卽個物的限定、個物的限定卽一般的限定といふ樣に自己自身を限定するものを意味するのである。物理的世界といふ如きものも、右の如き辯證法的限定の世界から個物的限定の意義を極小としたものに過ぎない、何處までも個物的限定の意義を除去して考へられたものである。之に反し自由なる自己の世界と云つても、何處までも一般的限定を離れたものではない。我々の個人的自己といふものも、單に個人的自己として考へられるのではなく、社會的歷史的に限定せられたものとして、有ると考へられるのである。我々が行爲すると考へる時、我々の行爲といふものは單に內から發すると考へられるかも知らぬが、それは何處までも個物的卽一般的限定として考へられるものでなければならない。夢といへども社會的歷史的限定を離れたものではない。而して我々は我々を、行爲的自己として、我々が有ると考へるのである。單なるコギト・エルゴ・スムの自己は抽象的自己たるを免れない。我々の主觀的世界と考へられるものは、上に我々が內的統一として直線的と

考へるものは、その根柢に於て圓環的でなければならぬと云つた意義に於て、圓環的でなければならぬ。而もそれは私の所謂無の場所的限定といふ意義を有つてゐなければならない。直線的限定と考へられるものは、かゝる限定から考へられるものでなければならない。

多くの人々は先づ相對立する內界と外界、主觀界と客觀界といふものを考へ、かゝる兩界の相互限定として現實の世界といふものを考へる。併しかゝる對立的世界が固獨立に存在するのではなく、かゝる兩界はいつもこの現實の世界の兩方向として、この現實の世界から考へられるものでなければならぬ。現實の世界といふのは、個物と個物との相互限定の世界と考へられるものでなければならない、媒介者Mの自己限定の世界と考へられるものでなければならない、辯證法的一般者の自己限定の世界と考へられるものでなければならない。之に於てあるものは、何處までも個物的に自己自身を限定すると共に、何處までも一般的に限定せられると考へられる。個物的限定といふのは、單に一つの個物が自己自身を限定するといふことではない。唯一つの個物といふものは考へられない。個物が個物自身を限定すると考へられる時、それは一應限定するものなき限定と考へられるであらう。併しそれは單に何

等の限定もないといふことではない。個物は單に無媒介的に自己自身を限定するといふことではない。個物は個物に對して限定せられるのである。而も個物が個物に對して限定せられるといふことは、唯無數の個物が並列するといふことではない。是に於ては、我々の意識統一に於て考へられる樣に內的統一といふものが考へることができる。意識統一に於ては、一々の部分が獨立と考へられる。而もそれが全體の意義を有すると考へられるのである。時の連續に於ても、各の瞬間が獨立絕對と考へられる。而も斯く各瞬間が獨立と考へられることが、流れて還らざる一度的なる時の統一を形成すると考へられるのである。時の統一は各の瞬間の自己限定から考へられると云ふことができる。かゝる限定は一應無限なる直線的限定と考へられねばならぬ。併しかゝる限定は單に直線的と考へられるものではない。それはやはり曲線的と考へられねばならない、圓環的と考へられねばならない。時の各瞬間が單に消え去るならば、時の統一といふものは成立せない。時が永遠の現在の自己限定として考へられるといふ所以である。併しそれは一つの中心を有つた圓であつてはならぬ、閉ぢられた圓であつてはならぬ。如何に無限大の圓であつても、斯く考へられるかぎり、時といふものは考へられない。時は無の一般者の限定

として考へられるといふ所以である。而してかゝる意味に於て無の一般者と考へられるものは、私の所謂辯證法的一般者として、個物と個物との媒介者Mの意味を有つたものでなければならない。かゝる一般者の限定として、時といふものが考へられるのである。我々は限定するものなき限定として、創造作用といふものを考へる。併し眞の創造といふことは內が外、外が內といふことでなければならない。內的統一といふものが考へられるかぎり、眞の創造といふものは考へられない。單なる內的統一は唯一つの個物Eといふ意味を脫することはできない。之に對して外的統一として、いつも單なる一般者Aといふものが對立するのである。併しMに於ては集中が擴散であり、擴散が集中であるといふ意味がなければならない。現實の世界が世界自身を限定するのである、現在が現在自身を限定するのである。時といふものも、現在が現在自身を限定するといふことから考へられるのである。時を單に直線的と考へる時、時は瞬間が瞬間自身を限定するといふことから考へられるとも云ひ得るでもあらう。併し瞬間は固、摑み得るものではない。瞬間は現在の自己否定卽ち自己擴散によつて成立するのである。故に無數の瞬間が成立するのである、各人が各人の時を有つと考へられるのである。現實の世界が世界自身を限定すると

考へられる時、無數の瞬間が成立するのである。故に時の統一に於て各の瞬間が消えて生れるといふことは、各瞬間が無限大の圓の周邊を廻るといふ如き意味でなければならない、否中心なき圓の周邊を廻るといふ如き意味を有たなければならない。非連續の連續といふことは、斯く考へられねばならない。各人が各人の時を有つと考へられる我々の個人的自己といふものも、辯證法的に自己自身を限定する世界の自己擴散の方向に考へられるものでなければならない。故に我々の行爲は歴史の中に失せ行くと考へられるのである。

內的統一が卽外的統一であり、外的統一が卽內的統一であり、絕對の否定が卽絕對の否定であり、絕對の否定が卽絕對の肯定であるといふことを意味する個物と個物との媒介者Mは、辯證法的一般者の自己限定として、その內的統一の意味に於て無限に自己自身を限定すると考へられると共に、その外的統一の意味に於て無限に自己自身を否定すると考へられねばならない、絕對に縱に自己自身を限定すると考へられると共に、絕對に橫に自己自身を限定すると考へられねばならない、宇宙時の流として自己自身を限定すると共に絕對に自己自身を限定するのである。それはパス

カルの所謂周邊なくして到るが中心となる無限大の球の自己限定の如きものである。故に現實の世界は無限に縱から限定せられると考へられると共に、無限に周邊から限定せられて居ると考へられる、主觀客觀の交叉面と考へられる。此の世界に於てあるものは、主觀的なると共に客觀的、客觀的なると共に主觀的と考へられる。普通にはかゝる兩界が別々に考へられ、かゝる兩界の交叉面として現實の世界が考へられるのであるが、逆にかゝる兩界は個物と個物との媒介者Mの世界、辯證法的世界の自己限定の兩面として考へられねばならない。その自己限定として內在的世界といふものが考へられ、その自己否定として超越的世界と考へられる。我々の自己といふものは、かゝる世界の自己限定と自己否定との間に考へられる個物的なものである。故に我々の自己はパスカルのいふ如く、いつも無限と無との二つ深淵に臨んでゐると考へられるのである、全體と無との間にあると考へられるのである。我々の自己は現實の世界が現實の世界自身を限定することから考へられるのである。我々の行爲は無から出て無に返ると考へられると共に、絕對を主體となすといふことができる、時の瞬間が周邊なき圓の周邊を廻ると考へられる如く、絕對の世界を廻ると考へることもできる。斯くして、我々の行爲は限定するものなき限定とし

てすべてポイエシスの意味を有つといふことができるのである。

## 二

個物的なるものは一般的なるものの自己限定として考へられねばならぬ。而も個物は單に一般の自己限定として考へられるのでなく、個物は自己自身を限定するものでなければならない。而して個物が自己自身を限定するといふことは、個物が一般として自己自身を限定することでなければならない。故に具體的論理に於ては、個物が一般である、主語が述語であると考へられる。實在的なるものは、かゝる論理的構造を有つてゐなければならない。かゝる意味に於て辯證法的統一と考へられるものが、眞に自己自身に同一なるもの、自己同一と考へられるものでなければならない。自己自身に同一なるものといふものは、單に一つの物といふ如きものであつてはならぬ、單に主語となつて述語とならないものと云ふだけのものであつてはならぬ。然らざれば、それは一つの極限點とか、一つの中心とかいふ如きものに過ぎない、要するに一つの點と擇ぶ所はない。自己自身に同一なるものは、主語となつて述語とならないと共に、自己自身について述語するものでなければならない、述語的に自己自身を限定するものでなければならない。逆にそれは述語が主語となるも

の、述語的にして主語的に自己自身を限定するものでなければならない。それに於ては、一卽多、多卽一といふことができる。眞に自己自身に同一なるものは、一にして多なるもの、多にして一なるものでなければならない。而して同一判斷が直覺的なるものを主語となすと考へられる如く、自己自身に同一なるものは主語的には、對象的には直覺的と考へられるものでなければならない。眞に直覺的と考へられるものは、普通考へられる如く單に見られたものといふ如きものではなく、自己を自己によつて限定するものでなければならない。否それは自己が自己自身を言ひ表す自覺的意義を有つたものでなければならない。之に反し我々の自覺が自己同一の意義を有つと考へられるのは、自己が自己自身を見ると考へられる故でなければならない。更に我々の自覺に於ては自己が自己に於て自己を見ると考へられる。我々の自覺が勝義に於て自己同一と考へられる所以である。

右に云つた如く、自己自身に同一なるものが、一にして多、多にして一なるものであるならば、眞に自己自身に同一なるもの、眞に自己自身を限定するもの、眞に自覺的なるものに於ては、その多は眞の多でなければならない、絕對に相獨立するものの多でなければならない、無數の個物の意味を有つてゐなければならない。卽ち眞に自己

同一なるものは、個物と個物との媒介者Mの意味を有つたものでなければならない、私の所謂辯證法的一般者の意味を有つてゐなければならない、場所的限定と考へられるものでなければならない。普通に自己自身に同一なるものと云へば、ノエマ的方向に、主語的方向に一つのものを考へる、一といふ方向に重點を置いて考へる。併しかゝる意味に於て考へられた自己同一といふのは、眞の自己同一ではない。それは何處までも唯一つの物といふ意義を脱せない。眞に自己自身に同一なるものは單なる一般者Aとして考へることもない、單なる個物Eとして考へることもできないものでなければならない、何處までも直線的限定としても考へられないと共に、圓環的限定としても考へられないものでなければならない。さういふ意味に於ては、それは絶對に無と考へられるものでなければならない。眞に自己同一なるものは、唯現在が現在自身を限定することから考へられるのである、場所が場所自身を限定することから考へられるのである。我々の個人的自覺といふものも、單に直線的に自己自身を限定する個人の自己限定から考へられるのでなく、却つて社會的歴史的限定から考へられるものでなければならない。社會といふものなくして自己といふものはない。私は汝に對することによつて私であるのである。直覺的なるもの

と云つても、眞に直覺的なるものは、我々の行爲によつて見られるといふ意味を有すると共に、逆に我々の行爲を限定する意味を有つたものでなければならない。藝術的直觀の如きものが勝義に於て直覺的と考へられる所以である。

我々は現實の世界の底を知ることはできない。併し現實の世界はそれ自身の統一を有つたものでなければならない。何等の統一をも有たないものは一つの世界といふことはできない。而してすべて有るものは、かゝる世界に於てあるのである。かゝる世界の統一は如何に考へられるものであらうか。それは單に直線的に、時間的に統一せられたものではない。世界は單に流れ去るものではない。然らばと云つて、それは單に圓環的に、空間的に統一せられたものでもない。世界は單に永遠不變なるものでもない。世界は各の時代に於て、それ自身の統一を有つ。それは一であると共に多として自己自身を限定し、それは多であると共に一として自己自身を限定する、卽ち自己同一的に自己自身を限定する。而も各の時代がいつもそれ自身に於て完成せられたものでなく、一定の發展に達すると共に、卽ち時が熟すると共に、自己自身の中から自己を否定して、次の時代に移つて行く。斯くして無限に世界が

世界自身を限定して行くと考へられるのである。世界が世界自身を限定すると考へられる世界の連續とは上に云つた如き意味に於ての自己同一的でなければならぬ、場所が場所自身を限定する場所的限定の意味に於ての連續でなければならない。普通に世界の連續といへば、單に直線的なるものが考へられる。併し單に直線的と考へられるものは、主觀的世界の連續たるに過ぎない。それは單に一つの個物が個物自身を限定するといふ個物的限定の意味しか有つことはできない。歷史は主觀的に構成せられたものではない。主觀的に構成せられたものは歷史ではない。ランケが歷史の各の時代は神に直接して居り、各の時代はその存在に於てそれ自身の價値を有つ、歷史家は事物を見なければならぬといふ所以である。

我々の歷史的世界は何等の足溜もなく、唯連續的に無限の過去から無限の未來へ流れ行くものと考へられる。併しかゝる考を徹底すれば、歷史的世界といふも、連續的な一直線的進行といふ如きものに過ぎない、唯、一つの個物が個物自身を限定するといふの外に出ない。かゝる歷史は唯考へられた歷史的世界に過ぎない。眞の歷史の世界に於ては、我々が客觀を限定し、客觀が我々を限定するのである。歷史の世界は行爲の世界でなければならない。而して働くといふには足溜といふものがな

ければならない。歴史の世界を唯一直線的進行の如く考へるのは、歴史的世界の進行を我々の個人的自覺の形式に當嵌めて考へる故である。その自己統一を内部知覺的統一の如きものと考へる故である。又我々は普通考へる如く時の進行を單に連續的直線の如きものと考へ、かゝる意味に於て歴史的世界を時間的實在と考へることから、然考へられるのである。併し我々の個人的自覺の統一と考へられるものに於ても、それが行爲的自己の自覺と考へられるかぎり、單爾考へ得るものではない。働くといふには、足溜がなければならない。我々の自己は現在の世界に於てあり、我々の行爲的自覺の野といふものが現在の世界であり、現在の世界が現在の世界自身を限定するといふことから、行爲的自己の自覺といふものが考へられるのである。故に上に云つた如く我々は行爲に於て絶對の世界を廻ると考へることもできるのである。場所が場所自身を限定するといふ意味を有するかぎり、我々は行爲的自覺を有つのである。内部知覺的自己の統一といふ如きものであつても、意識の野が自己自身を限定するといふことから考へられねばならない、單に直線的連續として考へられるものではない。我々の省みられた自己は各の瞬間に於て意識の野に於てあると考へられる、現在に於てあるのである。かゝる意識の野の自己限定として、内

部知覺的自己といふものが考へられるのである。意識作用といふものは、すべてかゝる意味を有つたものである。我々は普通に各の自己が、否各の瞬間に意識面といふものを有ち、意識面といふものは各の自己に、否各の自己の各の瞬間に屬するものの如くに考へて居るのであるが、意識面といふのは一つの世界でなければならない、辯證法的世界の一面でなければならない。故に意識は志向的と云ひ得るのである。各自の意識といふものは、かゝる意識面の自己限定として考へられるものでなければならない。時の形式といふ如きものも、上に云つた如く單に直線的連續として考へられるものでなく、時は現在が現在自身を限定するといふことから考へられねばならない。時は且の自己限定として考へられねばならない。そこに時の自己同一性があるのである。ドロイゼンはその「史學研究法」に於て次の樣に云つて居る。歷史に於て與へられたものと云ふのは、單に過ぎ去つたものではない、過ぎ去つたものではあるが、尙現在に於て過ぎ去らないものである、現在から思ひ起されるものである。有限なる我々の精神は唯此處此時から考へる。併しいつも前を見、後を顧みる、未來と過去とを結合して永遠の相を有つて居ると。又我々は理解によつて何處までも自己を擴げて行く、內から外を理解し、外から內を理解する。個物が全體から理

解せられ、全體が個物から理解せられる。理解は分析的であると共に綜合的である。而も理解作用 Akt des Verständnisses は理解の論理的機械作用 logischer Mechanismus と異なつて、魂が魂の中に潜る如く直覺的である。而して人は他を理解し他から理解せられることによつて全體となると云つて居る。此の如き歴史の世界は右に云つた如き意味に於ての自己同一として考へられなければならぬ、卽ち辯證法的一般者の限定として考へられなければならぬ。我々が行爲するといふのも、かゝる世界に於てでなければならない。行爲的自己の立場から見られる世界は、此の如きものでなければならない。歴史的認識に於ては、一般的なるものは、自然科學的認識に於ての樣に、單に自己に對立するものではない、自己に對立すると共に自己がそれに於てあるものである。歴史的認識に於ては、自然科學に於ての如き客觀性がないと考へられる所以である。西南學派に於ては、歴史は個性を中心として構成せられると云ふが、個性といふものは、私の云ふ如き意味に於て、自己同一として考へられたるものでなければならない。

歴史の世界は表現の世界と考へられる、了解の對象界と考へられる。併し歴史の

世界は自己限定するものでなければならない、我々の行爲を限定するものでなければならない、我々がそれから生れ、それへ死に行くとも考へられるものでなければならない。表現的なるものが如何にして自己自身を限定すると云ひ得るか。表現の內容といふものは、ボルツァーノ以來客觀的と考へられるが、それはそれ自身に何等の限定もない、單なる了解の對象とも考へられる、鄕土なき對象とも考へられる。ロゴスはドクサでもあり、世間話でもあり得るのである。私は是に於て我々の話し合ふことのできる世界、表現の世界といふものが、その根柢に於て如何なるものなるかを考へて見なければならない。言語の起源についてコントの如く我々は我々の思想を傳へるために言表するのではなく、言表するが故に我々は互に思想を傳へると考へることができる。言語の起源は情緒的生活に求められなければならない。ドイツのロマンティーケルは言語の起源を人類の原始詩作に求めたと聞く。言語は單なる知的內容の表現ではない。言語は固獨語ではなくして、會話でなければならない。言表は先づ命題といふ如きものではなくして、命令と應答といふ如きものでなければならない。我々の社會的生活そのものの自己限定の內容として、表現の內容といふものが成立するのである。各自の意識內容の表現から表現の世界といふ

ものが成立するのでなくして、我々は固社會的であるから表現することができるのである。我々が社會的であるといふことは同時に我々は言語を有つといふことを意味するゾーン・ポリティコンであるといふことは、同時に我々は言語を有つゾーン・ロゴン・エコーンであるといふことを意味する。而して社會的ならざる人間といふものはない、單なる個人といふものはない。人はホモ・ファーベルであると共に、ゾーン・ロゴン・エコーンでなければならない。人間の行動といふものは、すべて表現的意義を有するのである。

それで如何にそれ自身の限定を有たない世間話の如きものといへども、その成立の根柢に、社會といふものがなければならない。かゝるロゴスを有つた社會、表現の世界といふものは、如何にして考へられるものであらうか。我々はその底に單に我々の意識を超越した物質界といふ如きものを考へることはできぬ。又それは單に所謂生命の世界といふ如き合目的的世界と考へることもできぬ。否、普通考へられる樣に、單にノエマ的に社會とか歴史とかいふものを考へるのでも、かゝる自己自身を表現する世界を考へることはできぬ。それは私が右に云つた如き意味に於て自己同一的に自己自身を限定する世界でなければならない。無限に自己同一的に自

己自身を限定する世界は、無限に時間的に自己自身を限定すると考へられると共に、無限に空間的に自己自身を限定すると考へられねばならない、無限に縱に自己自身を限定すると考へられると共に、無限に横に自己自身を限定すると考へられなければならない。而もそれがMの自己限定として現在が現在自身を限定すると考へられる時、無限なる縱の限定と考へられるものは、無限なる横の限定と考へられるものでなければならない。我々の行爲的自己は時を包む一般者に於て自己自身を限定するのである。行爲の世界に於ては、我々は縱に見るものを横に見るのである。そこに我々はいつも現在の世界を圍む無限の周邊を見る。ジェームスは嘗て意識の緣暈といふことを云つたが、現實の世界は實に無限の緣暈を有つのである。そこには何等の限定するものなく單なる無の世界が考へられる、ハイデッケルの所謂人の世界といぶ如きものを考へることができる、單なる世間話を考へることができる。而してそれが又何等かの意味に於て我々を限定する意味を有するかぎり、我々はかゝる世界の底に無限の不安を感ずるのである。併し現實の世界はいつも閉ぢられたものではなく、單に統一せられたものではないと云つても、それは單に無統一とか、無限定とかいふのではない、無限に自己同一的に自己自身を限定するものとして、い

つもその時代その時代に統一を有つたものでなければならない。斯く現在が現在自身を限定するといふことが、現實の世界が無限の周邊を有つといふことを意味するのである。而してかゝる世界は辯證法的一般者の自己限定の世界として、いつも一面に個物が個物自身を限定するといふ意味を有つてゐなければならぬ。個物的自己の自己限定の世界の緣暈として人の世界といふものが成立するのである。我々の自己はいつも個人的なると共に、非個人的なる人の世界に屬すると考へられる所以である。物が表現的であるとか、我々が客觀的に表現の世界を見るとかいふことは、唯かゝる世界に於て考へられるのである。この世界は無限に自己同一的に自己自身を限定すると共に、無限に自己自身を否定し、無限の周邊を有つと考へられるが故に、この世界に於てあるものは、何處までも無限なる周邊の世界に於てあると考へられる、無限なる緣暈を有つと考へることができる。而してその無限なる周邊と考へられるものは、その極限に於て、それ自身に何等の自己限定を有たない、單なる無とも考へられるものなるが故に、於てあるものは單なる記號として、何等それ自身の限定を有たない單なる意味の世界といふ如きものが考へられるのである。私の所謂場所的限定として、之に於てあるものは、始に意識統一について云ふ如く部分が全

體の意味を有つて居る、部分が全體を代表して居ると考へることができる。場所が自己同一的に自己自身を限定するものとして、部分と全體とが一であると考へられるかぎり、それは直覺面的限定として、表現的に自己自身を限定するものの世界、行爲的自覺の世界といふものが考へられるが、その自己否定の方向に於て、いつも無自覺が考へられるのである。併し如何に周邊的なる無自覺的世界といつても、人と人とが話し合ふ世界、社會的に自己自身を限定する世界の意義を有つてゐなければならない、自己同一的に自己自身を限定する意義を有つてゐなければならない。併し私が斯く云ふのは、個人といふものが先づあつて、それから言表といふものが成立するといふのではない。個人といふものは、かゝる世界の自己同一的限定として考へられるものに過ぎない。我々の意識は却つて社會的意識から始まるのである。言語の起源がパトス的であると考へられるならば、パトスといふことは既に未だ行爲的自覺に到らない自己同一的限定の意義を有つてゐなければならない。

## 三

私は現實の世界は自己同一的に自己自身を限定し、而してかゝる限定は現在が現在自身を限定するといふことから考へられると云つた。時の進行といふものも斯

く考へられなければならない。併しかゝる論理的限定は我々の體驗上如何に考へられるものであらうか。超越的なるものが內在的に、內在的なるものが超越的に、一にして多、多にして一といふものが我々に直觀的と考へられるものであり、私は現實の世界が自己同一的に自己自身を限定するといふことは、直觀的に自己自身を限定するといふことゝ考へることができると思ふ。直觀といへば、直に藝術的直觀といふ如きものが考へられ、世界が直觀的に自己自身を限定するといふことは、世界の構造を藝術的に考へることであり、それは一種の神祕主義に過ぎないとも考へられるであらう。從つてそれは現實の世界を考へる立場と正反對の立場に立つものであつて、さういふ立場から現實の世界を考へることはできないと云はれるかも知れない。併し斯く考へられるのを、直觀的統一といふものを、單にノエマ的に考へ、自己同一といふことを單に主語的に考へる故でなければならない。藝術的直觀の世界といふも、固現實の世界を離れて考へられるものでなく、眞の藝術は却つてこの社會的歷史的世界の限定として成立するものでなければならない。之に反し現實の世界と考へられるものには、何等かの意味に於て直覺的なるものがなければならない、直覺的なるものが中心とならなければならない。いつも直覺的なるものが現實の世

界と考へられるのである。我々の行爲と考へるものに於ても、何等かの意味に於て見るといふ意味がなければならない。そこに我々の行爲といふものと、單なる運動とか、單なる空想とかいふものとの區別があるのである。加之、行爲は單に合目的作用と考へることもできない、行爲はポイエシスでなければならない。

行爲といふものは、單なる運動でもなければ、單なる欲求とか、動機とかいふものでもない。行爲に於ては主觀が客觀を限定し、客觀が主觀を限定する、而も主客合一として我々は外に物の成立を見るのである(決斷といふ如き單なる內的行爲と考へられるものでも、それはこの歷史的世界に於ける一つの出來事であるのである)。かゝる行爲といふものは、何處から如何にして起るものであらうか。我々は之を單に外から起ると考へることもできなければ、單に內から起ると考へることもできない。主客の對立を考へ、その間に何等の統一を考へることができなければ、主觀が客觀を動かし、客觀が主觀を動かすといふ如きことは考へられない。而も單にノエマ的に主客合一といふものを考へれば、行爲といふ如きものゝ起り樣はない。我々の行爲は我々の意識的自己から起ると考へられる。意識的自己といふものなくして、行爲といふものゝないことは云ふまでもない。併し意識的自己から行爲が起るといふ

には、意識的自己といふものは欲求的でなければならない、衝動的でなければならない。而して欲求とか衝動とかいふものゝ底を深く考へれば考へる程、それは我々の意識を越えたものでなければならない、我々の外にあるものでなければならない。さういふ意味に於ては、我々の自己はこの世界に於て與へられたものでなければならない。我々は今此處にある。併し我々は何故に其處でなくて此處に、彼時でなくて此時にあるかを知らない。我々の自己を行爲的と考へれば考へる程、然考へざるを得ない。併し我々の自己はこの現實の世界から與へられると云つても、この現實の世界といふものが單に物質的と考へられるならば云ふまでもなく、合目的的と考へられても、否單に精神的と考へられても、それから我々の行爲的自己といふものは考へることはできない。それは前に云つた樣に、辯證法的世界の自己限定から考へられるものでなければならない。時の進行が現在が現在自身を限定するといふことから考へられ、消えて生れると考へられる時の瞬間は無限の果を廻ると考へられる如く、我々の行爲は辯證法的世界を主體とすると考へられなければならない。

由來、直觀といへば、單に受働的に物を受取ると考へられ、或は單に自己が物に於て自己を失ふことゝ考へられる。併し藝術的直觀の如きものに於ても、見るといふこ

とは働くことであり、働くといふことは見るといふことでなければならない。藝術的直觀は無限の作用でなければならない。藝術的創作作用に於ては、我々は概念的に物を構成するのでない、又單に受働的に物を模倣するのでもない。物が我を啖すのである、我々を動かすのである。物が我となり、我が物となる。而もそれが主客合一の作用として、無限に自己自身を限定して行くのである。私は藝術的創作といふものは何處までも終結するものではない、藝術的作品は何處までも未完成と見るべきであると云ふのは此故である。唯、それが一つの作品として外に見られる時、それはそれ自身に於て獨立する一つの物として、私の作用といふものから離れたものと考へられる、單なる鑑賞の對象と考へられる、私に對すると同じく、又汝に對し彼に對すると考へられる。而してそれは私の創作作用の起源となり、繼續となり得る如く、彼の又彼の創作作用の起源ともなり、繼續ともなり得るのである。右の如く作用が作用を生む純なる作用とも考へられる藝術的創作作用といふものが、如何にして我々に直觀と考へられるか。私はここに於て我々の內部知覺といふものについて考へて見なければならない。內部知覺といふものをも、我々は一種の直覺と考へる。併しそれは如何なる意味に於て直覺と考へられるか。我々の內部知覺といふもの

は時間的と考へられるが、單に直線的と考へられてはならない。記憶といふものにも、足溜がなければならない。それは我々に意識の野と考へるものゝ自己限定として考へられるものでなければならない、Mの自己限定の形に於て考へられるものでなければならない。Mの自己限定と考へられるものは、個物と個物との媒介として、限定するものなき限定、卽ち無限なる直線的限定と考へられると共に、個物は何處までも一般者の限定として考へられるといふ意味に於て、卽ち所謂一般者Aの限定有の一般者の限定として、無限に圓環的限定と考へられるものでなければならない。而もMの自己限定といふのは、かゝる兩方面の交叉面といふ如きものではなくして、かゝる兩方向といふものは却つてMの自己限定から考へられねばならない、場所が場所自身を限定することから考へられない。我々の意識作用と考へられるものは、かゝる自己自身を限定する世界の直線的限定の方向に考へられるものでなければならない、卽ち無の限定の方向に考へられるものでなければならない。而してそれが固場所的限定として、その根柢に於て圓環的限定の意義を有するものなるが故に、意識の世界といふものが考へられるのである。我々の意識の野と考へられるものは、かゝる世界に於て一つの個物的限定として考へられるものでなければならない。

それは私の所謂自己同一的限定の意味に於て、自己同一的に自己自身を限定する意味を有つたものである。個物と個物との媒介Mの自己限定から、無數に自己同一的に自己自身を限定する個物的限定の意義を有つたものが考へられるのである、無數のEが成立するのである。故に、我々の個人的意識といへども、獨我論者の考へる樣に、世界を離れてあるのではない、直接的限定は圓環的限定を離れてあるのではない。我々は我々の內部知覺と考へるものに於て、その直線的進行の各瞬間に於て、いつも自己を越えたもの、感覺的なるものに觸れると考へなければならない。かゝる意味に於て感覺的なるものがなければ、內部知覺といふ如きものもない。而もその各瞬間といふのは單に移り行く點といふ如きものではなくして、圓環的でなければならない。內部知覺といへども、現在が現在自身を限定するといふことから考へられるのである。意識の野といふものが考へられる所以である。故に我々の自己が實在的と考へられるかぎり、內的感覺はいつも外的感覺の意義を有ち、外的感覺はいつも內的感覺の意義を有つ。內的事實卽外的事實、外的事實卽內的事實と考へられる所以である。內的時間外的時間、內的空間外的空間にしても同樣である。その實、內的なるものを離れて外的なるものがあるのでなく、外的なるものを離れて內的なるも

のがあるのではない。斯く內部知覺といへども、その現實に於て感覺的なるものに觸れてゐなければならない、感覺的でなければならない。然らざれば考へられた意識統一に過ぎない。斯く云ふことは我々の內部知覺的自己といふものも、世界が世界自身を限定することから考へられるといふことを意味するのである。內部知覺的自己卽ち我々の自己と考へるものが、一つの世界が世界自身を限定する意味を有し、働くものと考へられる所以である、純なる作用とも考へられる所以である。更に我々の眞の自己は行爲的と考へられねばならない。我々の意識統一は、その根柢に於て、行爲によつて基礎附られると考へられねばならない。而して我々の行爲といふものは單なる運動ではない。行爲には我々がそれによつて何物かを見るといふ意味がなければならない。我々の內部知覺的自己の自己限定に於ても、見るといふ意味がなければならない。唯それは見るといふ意味を有しながらも、何處までも見ることのできないのである、物を見るに到らないのである、直線的限定として圓環的限定に到らないのである。

私は是に於て行爲といふことゝ見るといふことゝについて考へて見なければならない。行爲は單なる運動でもなく、單なる合目的的作用でもない。我々は行爲に

よつて外に物を造るのである、客觀的に我々に對するものを造るのである。行爲はポイエシスでなければならない。客觀的に我々に對するものは、單なる物質といふものでない、表現的なるものでなければならない。そこに見るといふ意味があるのである。アリストテレスは家の形相は心の中にあると云つたが、家の形相は單に大工の頭にあるのではない、家の形相は單なる空想ではない。それは客觀的に可能性を有つたものでなければならない。それは客觀的條件に從つて構成せられるものでなければならない、技術的に構成せられるものでなければならない。故にそれはイデヤ的意義を有つものでなければならない。無論、私は行爲の形相といふものが單に客觀的であるといふのではない。併しそれは單に主觀的でもない。それは主觀的客觀的客觀的主觀的でなければならない。さういふ意味に於て、それは私の所謂場所限定の內容として考へられるものでなければならない。この世界を單に一般的なるものゝ限定と考へれば、我々の行爲と云ふ如きものも、單なる運動と考へる外ない。又個物が一般であるといふ如き有機的統一と考へても、我々は外に物を造るといふ如きことは考へられない。唯、絕對に限定するものなき限定として、私の所謂自己同一的に自己自身を限定する世界に於て、卽ち社會的歷史的に於て我々が外

に物を造り、物が我々を限定すると云ひ得るのである。我々は何處までも直線的限定として、圓環的なる物の世界に對立して居る。その間には絶對の斷絶がなければならない。而も我々はこの世界から出でて、この世界に消えゆく、我々は絶對の否定を通じて、我々自身を肯定する。そこに我々が外に物を造るといふ意味があるのである(そして物は自分を附託するといふ如きことも考へ得るのである)道德的行爲といふものに於ても、我々は單に我々の内からの當爲に從ふのでなく、我々は外に物を造るといふ意味がなければならない。眞の善は我々が於てある世界の自己限定の内容たる意義を有たものでなければならない。是故に我々は我々の行爲について無限の責任を有つのである。藝術的創作作用といふものも、固右の如き意味に於て行爲といふ性質を有つたものでなければならない、外に物を造るといふ意味を有つたものでなければならない。藝術は固一種の技術の意味を有つてゐなければならない。藝術的創作作用といふも、固社會的歴史的世界の自己限定として起るものでなければならない。藝術のイデヤは天上より來るものではなくして、この大地から生れるものでなければならない。唯、藝術的創作作用に於ては、物と我とが一となると考へられる、主と客とが一となると考へられる。藝術的創作作用が勝義に於て直

觀と考へられる所以である。併し藝術的創作作用に於ても、何處までも物が我になるのでもなければ、我が物になるのでもない。之に反し我々が知覺的に物を見るといふ時、既に主が客であり客が主であるといふ直觀の意義か含まれて居るのである。唯、自己同一的に自己自身を限定する世界の自己限定に於ては、現在が現在自身を限定するといふ意味を有するが故に、藝術的創作作用といふ如きものが成立するのである。それは時代が時代自身を限定するといふ如き性質を有つたものでなければならない。

それで我々の行爲的自己の自己同一といふものは、單に直線的に考へられるものでもなければ、單に圓環的に考へられるものでもない、單に意識的に考へられるものでもなければ單に物質的に考へられるものでもない。物が我を限定し、我が物を限定する主客合一の作用的に考へられるのである。我々の自己の底には欲求といふものが考へられるが、欲求といふものは、我々の意識の内から起るのではない。我々が物の世界に於てあるといふことから起るのである、我々が身體を有つからである。而して欲求の對象と考へられるものは、單に所謂物といふものではない。それは表現的なものでなければならない。我々人間が單に生物學的と考へられるならばと

にかく、然らざるかぎり、我々の欲求といふものは社會的・歷史的でなければならない。而して我々が行爲によつて欲求を滿足するといふことも、何等かの意味に於て客觀的に物を變ずる、物を造るといふ意味を有つてゐなければならない。我々の行爲といふものは、歷史的世界の出來事の意味を有つてゐなければならない。それは社會的・が、すべて表現作用の意義を有し、世界が世界自身を限定するといふことから考へられる所以である。人間はホモ・サピーンスたるのみならず、ホモ・ファーベルと考へられる。我々は行爲するものでなければならず、行爲するといふには、行爲は主客合一的作用として、そこに技術といふものがなければならない。一方から見れば、單に運動の道具と考へられる我々の身體が我々の自己に本質的と考へられる如く、技術といふものが我々の行爲的自己に本質的なものでなければならない。而して技術といふものは、社會的・歷史的意義を有つたものでなければならない。無論個人の技術といふものと考へられるが、單に個人の身體に屬するものは、尙動物の本能に類するものである。言語の如きものも右の如き意味に於て技術の性質を有つてゐるといふことができる。道具といふものは我々の身體を離れたものでなければならない。加之、それは私の道具となる如く又他人の道具ともなるものでなければならない。

本質的にかゝる道具を有つものとして、卽ち技術的として、我々は世界的存在である。我々は單なる心でもなければ、單なる物でもない、存在論的存在である。主觀と客觀とは絕對に相反するものと考へられながらも、我々の行爲は主觀的・客觀的として、行爲的自己は主客合一的に自己自身を限定するものとするならば、我々の行爲的自己の存在といふものは、我々の意識とか身體とかを離れたもの、一言にて云へば我を離れたものによつて媒介せられねばならない、卽ち表現的なるものによつて媒介せられねばならない。道具といふ如きものも、表現的なるものである。自己同一的に自己自身を限定する世界の直線的限定として、我々の行爲的自己といふものが限定せられるのである。故に我々の行爲的自己といふものは、直線的に自己自身を限定すると考へられながらも、圓環的に、自己同一的に自己自身を限定し、物に於て自己を見ると考へられる。行爲的自己に對立するものは單なる意識の世界でもなく、單なる物質の世界でもない、表現的なる物でなければならない。永遠の現在に於て、我と物とが相對するのでなる。主觀的・客觀的限定、個物的一般的限定たる我々の行爲は、永遠の今の自己限定の意味を有つて居る。故に我々の行爲的自己の自己同一といふものは、いつも直觀的意義を有つて居るのである。

直觀といふことは、全體が一度に見えるといふことではない、單にすべてが同時にといふ如きことではない。唯、無限に一般者が一般的自身を限定するとか、場所が場所自身を限定するとかといふことを意味するのである、圓が圓の中に圓を限定するといふ如きことを意味するのである。さういふ意味に於ては、それは無限の過程と云つてよい。唯、それは單なる直線的過程とは異なつたものでなければならない。直觀的なるものは非概念的と考へられるが、歷史的認識といふ如きものに於ては、直觀といふ如きものが作用せなければならない。ドロイゼンは上にも引用した樣に、理解の論理的機械作用と理解作用とは異なつたものである、後者は魂が魂の中に潛る如く、直觀として起る。人間は相對的全體である。理解し理解せられて、彼は共同體の例であり、表現であると云つて居る。歷史的知識構成の基となる全體的なるものゝ把握は、直觀によらなければならない。歷史的理解の底には、直觀が作用すると云ふことができる。それは單なる分析によるのでもなければ、又推理によるのでもない。分析と云つても、分析せられるものは既に何等かの意味に於て全體の表現として與へられたものでなければならない。歷史的に有るものは、いつも全體によつ

て媒介せられてあるのである。無論有るものゝ分析、有るものと有るものとの關係の研究は、全體の內容を變じ行くでもあらう。併し全體の內容を變じ行くでもあらう。併し全體的なるものゝ把握は、又異なる作用でなければならない。自然科學的なるものに於ては、かゝる作用は特別の意味を有たないかも知れない。併し歷史的なるものに於ては、然考へることはできない。藝術的直觀に於ても、單に全體的なるものが突然與へられ、それをその儘實現するのではない。藝術家は一步一步に物を見て行くのである、而してその全體的なるものを訂正して行くのである。故にベルグソンの如く、藝術家自身も眞に如何なる作品が出來るかは、彼自身も知らないと云ひ得るのである。

歷史家が過去を理解するといふにも、右の如く直觀といふものが作用せなければならない。我々が現實の世界に於て働くといふ時、我々の行爲は單なる運動でもなければ單なる意識でもない。我々は一步々々に物を見て行くのである、全體の中に全體を限定して行くのである、現在の中に現在を限定して行くのである。我々は歷史の目的を知らない、歷史を構成しようとも思はない。又絕對否定を媒介とする歷史に、さういふことが考へられ樣もない。而も我々は藝術家が自己を知ることので

きない作品を構成するが如くに、歴史を構成して行くのである。上にも云つた如く、私の斯く云ふのは、世界の構造が藝術的だとか、我々の行爲がその根柢に於て藝術的だとかいふのではない。唯、現實が現實自身を限定するといふことは、右の如く考へられるものであり、種々なる文化は、かゝる限定によつて成立すると云ふのである。故に文化は見られたものといふ意味を有するのである。今藝術の詳論に入る暇はないが、藝術的作品といふ如きものは、かゝる限定に於て空間的限定、圓環的限定に卽して抽象的に見られたものに過ぎない。故に靜的であり、非實在的と考へられねばならない。行爲的自己といふものは、之に反し具體的實在として無限に直觀的に自己自身を限定するものである。右の如く全體の中に全體を限定するといふ時、全體が部分に先立つと考へることができる。併し私は歴史の根柢に、ドロイゼンの人倫的共同體といふ如きものを考へるのではない。私は全體といふのは、絶對否定を媒介とするもの、辯證法的一般者といふ如きものを意味するのである。所謂全體といふものは、かゝる一般者の自己限定として、ノエマ的に、主語的に見られるものである。我々の存在を決定するものは、却つて絶對の力とも考へ得るものである。無にして自己自身を限定するものは、無限の表現を有つたものでなければならない。世界は

無限に自己自身を表現するものである。而もそれが自己同一的に自己を限定すると考へられるかぎり、全體的なるものが見られるのである。我々の行爲といふものは、かゝる世界の自己限定として、成立するのである。表現的に自己自身を限定するものは、一にして多、多にして一なるものでなければならない。故に我々の行爲的自己と考へられるものは、主客合一的に物を見るといふ意義を有するかぎり、自己同一的に自己自身を限定すると考へられる(身體が自己と考へられるのも之によるのである)。唯、Mの自己限定と考へられるものは、一面に無限に直線的であり、個別的であるが故に、直線的に內部知覺的自己の自己同一といふ如きものが考へられるのである。(未完)